

1889年熊本地震直後の踏査報告の足跡をたどって

水田敏彦* (秋田大学地方創生センター)・鏡味洋史

§1. はじめに

1889年(明治22年)熊本地震は熊本市の直下で発生したM6.3の内陸地震であり、死者19名、負傷者53名、熊本城の石垣崩壊などの被害が発生した。100周年の1989年(平成元年)には表・久保寺¹⁾の「都市直下地震—熊本地震から兵庫県南部地震」が発刊されるなどこの頃に再評価が行われ、2016年(平成28年)熊本地震以降再び見直しが進められている^{例えば} 2)。筆者らも当時の被害調査報告や地域史料を中心に文献調査を行うことから始め、収集した資料を整理し調査項目や被害統計などの状況を報告している³⁾。被害地震の際に行われる踏査報告の多くは調査行程など被害情報の収集の過程についての記載を含まない。しかし、中には調査行程を詳細に記載しているものもあり、当時の交通事情を始め被害の少なかった道中の記載などを含め多くのことを読み取ることができる。筆者らは1896年(明治29年)陸羽地震について踏査日程・ルートを明らかにすることで、被害統計に表れない当時の状況を明らかにすることができた⁴⁾。本研究では各種の踏査報告を読み直すとともに当時の新聞記事などを参照し、各調査者の踏査の足跡を明らかにすることを試みる。

§2. 1889年熊本地震直後の調査報告

1889年は1886年の帝国大学令による帝国大学の発足直後で、日本人教授が多く登用された時期である。理科大学の初代地震学教授に着任した関谷清景や同じく理科大学地質学教授の小藤文次郎が熊本地震の現地調査を行っている。踏査は複数の機関で行われており、小藤文次郎、農商務省技師金田樞太郎、理科大学物理学講師長岡半太郎の報告が地学雑誌^{5)~7)}に、関谷清景の報告が東洋学芸雑誌⁸⁾にそれぞれ掲載され、長岡と関谷の簡単な踏査日程と調査地、金田の調査地の記述がある。その他、中央気象台の報告が地震に関する年次報告⁹⁾に掲載されているが、踏査に関する記載はない。

§3. 各調査の踏査行程

調査報告、単行本(熊本明治震災日記¹⁰⁾)、新聞記事より踏査行程を明らかにする。新聞は熊本の地方紙『九州日日新聞』、『熊本新聞』のマイクロフィルムを参照した。地震の発生は7月28日23時45分であり、踏査開始順に日程と調査地の概要を示す。

熊本県警察: 中島警部7月29日午前2時巡查1名 従え大津町へ出発、被害は少なくなり立野村から引返し西山(※震央付近の金峰山一带)へ。30日鳥越にて鳴動震動調査、飽田郡警察署巡查西山派遣、市川警部、川侯監督補西山付近海岸調査、8月1日

山本巡查海上調査、後藤巡查島原温泉岳視察。

理科大学小藤文次郎: 大分県に出張中地震に遭遇、至急出発8月1日の夜熊本着、下通町山本屋泊。2日県庁登庁県庶務課長、土木係、市助役、巡查1名を同伴市内調査、下通町静養軒泊。3日県係官、警察巡查、各新聞社特派員同伴西山へ。4日調査成果市民向け臨時報告。21日実地調査報告書内務省へ進達。31日三角港より汽船で長崎測候所へ気象取調、9月1日佐賀久留米へ行って帰京。

内務省地理局馬場信倫: 7月29日東京発、8月3日長崎着、4日長崎発、5日朝熊本着、知事、書記官と面談、県属の案内で現地調査。6日牛嶋巡查案内で西山調査。7日午後1時熊本を出発船で長崎へ。

侍従子爵富小路敬直、侍従荻昌吉: 8月2日午後6時30分敦賀丸にて神戸を出航下関へ。6日三角港着、午後1時頃熊本へ旅館阿弥陀寺町の旭亭着。福岡知事出迎え県庁及び第六師団等巡視。8日午前8時出発、堀警部補随行柳川へ。15日帰京復命。
理科大学長岡半太郎: 8月2日東京発、大分測候所訪問、竹田経由で8日熊本着。9日より現地調査。12日関谷教授に随行16日まで調査。17日熊本発、柳川佐賀を経て故郷肥前大村へ赴き帰京。

理科大学関谷清景: 地震当時箱根で病氣療養中。病をおして8月6日東京発、11日長崎から熊本着。12日より現地調査、地震計の設置などに奔走。24日休養のため熊本を出発三角港へ、長崎で療養。

農商務省金田樞太郎: 地震当時肥後、豊後、日向地方を巡回中。8月15日長崎より熊本着。16日より現地調査。21日阿蘇地方へ出発、宮崎県へ。

§4. まとめ

1889年熊本地震の被害調査報告、単行本、当時の新聞記事を再読し調査者の踏査行程の足跡をたどることを試みた。特筆すべき項目として、1)理科大学、各省庁の調査が行われて踏査行程を追うことができた。2)新聞などに調査者の動向が詳細に報じられていた。3)調査者への現地の協力、期待が読み取れる。4)九州への鉄道の開通前で、航路を利用し長崎、大分から九州に到着している。さらに、長崎から熊本へは熊本の外港である三角が利用されている。

【文献】1)表俊一郎、久保寺章:都市直下地震—熊本地震から兵庫県南部地震まで、古今書院、209pp、1998。2)山中佳子、新井田倫子:1889(明治22)年明治熊本地震の詳細震度分布、歴史地震、33、276、2018。3)水田敏彦、鏡味洋史:1889.7.28 熊本地震の被害調査報告および関連資料の文献調査、日本建築学会技術報告集、24、56、457-460、2018。4)鏡味洋史、水田敏彦:1896年陸羽地震の踏査報告の足跡をたどって、東北地域災害科学研究、53、133-138、2017。5)小藤文次郎:熊本地震概察報告、地学雑誌、1、9、399-410、1889。6)金田樞太郎:熊本地震調査報告、地学雑誌、1、9、410-415、1889。7)長岡半太郎:熊本の地震、地学雑誌、1、10、475-476、1889。8)関谷清景:明治22年熊本地震の原因に就て、東洋学芸雑誌、9、130、346-348、1892。9)中央気象台:7月28日の地震、明治22年地震報告、26-39、1889。10)水島貴之:熊本明治震災日記、活版社、214pp、1889。